

令和6(2024)年度
文部科学省委託事業「青少年国際交流推進事業」

日韓高校生交流 事業報告書



National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

目次

事業全体概要	1
--------	---

< 派遣事業報告 >

1. 参加者名簿	3
2. 日程	5
3. 派遣事業概要	6
4. 学習成果発表会	10
5. 参加者アンケート	14
6. 事業後の成果発表	15
7. 成果と課題	18

< 受入事業報告 >

1. 参加者名簿	25
2. 日程	27
3. 受入事業概要	28
4. 学習成果発表会	31
5. 学生リーダー感想	34
6. 成果と課題	36

事業全体概要

1. 事業趣旨

日本と韓国の高校生の相互交流を通して、高い国際感覚を備えた青少年を育成する。

2. 実施関係機関

(1) 主催

日本：文部科学省

韓国：国立国際教育院

(2) 実施

日本：独立行政法人国立青少年教育振興機構

韓国：株式会社インテリジェンス

3. 参加人数

日本：36名、引率者5名

韓国：36名、引率者5名

4. 日程

(1) 派遣

引率者研修 9月13日(金) オンライン

事前研修 9月21日(土) オンライン

派遣 10月21日(月)～10月25日(金) 5日間

(2) 受入

日本受入 10月 8日(火)～10月12日(土) 5日間

派遣事業報告

1. 参加者名簿

1) 参加者

	氏名	学校	地域
1	奈良 心優	北海道札幌国際情報高等学校	北海道
2	阿部 咲帆	岩手県立不来方高等学校	岩手県
3	竹原 あいら	秋田県立能代松陽高等学校	秋田県
4	三浦 永遠	秋田県立角館高等学校	秋田県
5	武藤 昊	秋田県立角館高等学校	秋田県
6	二藤部 華	山形県立北村山高等学校	山形県
7	梅田 愛理	福島県立あさか開成高等学校	福島県
8	菅波 有麻希	福島県立あさか開成高等学校	福島県
9	玉城 あいみ	群馬県立伊勢崎高等学校	群馬県
10	邊見 果穂	千葉県立松戸国際高等学校	千葉県
11	山田 仁恋	千葉県立松戸国際高等学校	千葉県
12	吉澤 佳名	千葉県立松戸国際高等学校	千葉県
13	元吉 さつき	千葉県立匝瑳高等学校	千葉県
14	山下 百波	千葉県立匝瑳高等学校	千葉県
15	村井 美月	神奈川県立横浜国際高等学校	神奈川県
16	石川 莉子	横浜市立横浜商業高等学校	神奈川県
17	田邊 琴乃	川崎市立橘高等学校	神奈川県
18	南部 絢加	富山県立伏木高等学校	富山県
19	児玉 桂都	長野県長野西高等学校	長野県
20	松本 茉莉	長野県長野西高等学校	長野県
21	有村 彩璃	学校法人三島学園知徳高等学校	静岡県
22	関口 詩乃	愛知県立千種高等学校	愛知県
23	眞野 はる	愛知県立尾北高等学校	愛知県
24	水野 凜香	愛知県立尾北高等学校	愛知県
25	藤沢 颯太郎	京都府立鳥羽高等学校	京都府
26	藤原 結	京都府立鳥羽高等学校	京都府
27	山村 佳稟	京都市立日吉ヶ丘高等学校	京都府
28	レイクラフト コーディリア 琴子	兵庫県立有馬高等学校	兵庫県
29	川越 なつき	大阪府立長野高等学校	大阪府
30	松元 里恋	和歌山県立星林高等学校	和歌山県
31	結城 万奈	広島市立舟入高等学校	広島県

32	村脇 由奈	山口県立下関中等教育学校	山口県
33	吉松 葉月	福岡県立博多青松高等学校	福岡県
34	酒井 楓香	長崎県立諫早商業高等学校	長崎県
35	横山 愛理	大分県立大分西高等学校	大分県
36	上原 青空	沖縄県立名護高等学校	沖縄県

2) 引率者

	氏名	所属	役職
団長	栗原 団司	国立江田島青少年交流の家	次長
引率	阿部 麻由里	国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター企画室	主任
引率	柴谷 紗良	国立青少年教育振興機構 教育事業部事業企画課	係員
引率	松本 真也	国立妙高青少年自然の家	係員
引率	山下 詩恩	国立淡路青少年交流の家	係員

2. 日程

	日付	時間	プログラム
-	9月21日 (土)	午前 午後	渡航に関する説明 講義：日韓の大衆文化・教育との関わり 団・班ミーティング
1	10月21日 (月)	午後 夜	仁川国際空港着 オリエンテーション
2	10月22日 (火)	午前 午後 夜	歓迎式 見学：ソウル市庁舎 訪問：東国大学 散策：明洞
3	10月23日 (水)	午前 午後	訪問：培花女子高等学校 見学：国会議事堂
4	10月24日 (木)	午前 午後	訪問：韓国民俗村 講義：手で咲かせるハングル 学習成果発表会
5	10月25日 (金)	午前	仁川国際空港発



3. 派遣事業概要

< 9月21日(土) >

事前研修会

名古屋外国語大学の福島みのり准教授より「日韓の大衆文化・教育との関わり」をテーマに講義を受け、韓国の大衆文化の成長理由やグローバル化に伴う英語教育について理解を深めた。団ミーティングや班ミーティングでは韓国の好きな文化や事前課題等を団員同士で共有した。



講義を受ける様子



団ミーティングで自己紹介

< 10月22日(火) >

ソウル市庁舎

ガイドの案内を受けてソウル市庁舎を見学した。常に世界を意識し、世界の中でソウル市がどのようなことに取り組み、どのような姿を目指しているのかとアピールするモニターがあり、グローバル意識の強さを感じられた。



市庁舎内を見学



市長室にて

東国大学

日本学科のソン・ジョンヒョン教授より「韓日文化コンテンツ産業の現状と未来」をテーマに講義を受けた。また、キャンパスツアーで学生の日常的な姿を見たり、交流会で在学生と実際に会話したことが大きな刺激となった様子であった。



在学生と意見交換



キャンパスツアーの様子



学生と一緒に集合写真

< 10月23日(水) >

培花女子高等学校

体育、音楽、討論といった授業にそれぞれ韓国人高校生と一緒に参加した。翻訳機等を駆使しながらも、これまで学習してきた韓国語を使って積極的にコミュニケーションをとっていた。教育における日本と韓国の共通点、相違点を考える機会となった。



授業でのグループワークの様子



体育の授業に参加



連絡先を交換

国会議事堂

実際に議会が開かれる議場を見学した。韓国では国会議事堂においてもデジタル化が進んでおり、日本の国会との相違点に気付く機会となった。



議会が開かれる議場を見学

< 10月24日(木) >

韓国民俗村

韓国式の建物を観覧したり伝統の飴作りを体験したりと、実際に古来の韓国の伝統文化や生活様式、慣習を肌で感じることができた。



韓国式の建物を観覧



伝統飴作りに挑戦

講義・演習「手で咲かせるハングル」

ハングル文字の由来や仕組みについて学び、実際に墨と筆でハングル文字を書き写すカリグラフィー体験を行い、ハングル文字への理解を深めた。演習の最後には、扇子にハングル文字や絵を描き、記念品を作成した。



韓国のカリグラフィーを体験



扇子完成

4. 学習成果発表会

- 1) 1班：阿部 咲帆、菅波 有麻希、田邊 琴乃、邊見 果穂、三浦 永遠、
水野 凜香、村脇 由奈、結城 万奈、レイクラフト コーディリア 琴子

共通点

- ・互いの国への関心が高い。(日本：K-POP や韓国料理 / 韓国：日本アニメやドラマ)
- ・流行が似ている。(相互の流行が影響しあっている。)
- ・学校生活が似ている。(授業内でスライドを使用する。)

相違点

- ・パリパリ文化(バスやタクシーや歩行者の速度が速い。配達が迅速。)
- ・湯船がない。
- ・路上駐車がが多い。(車庫証明が不要。駐車場が少ない。)

韓国のいいところ(日本に取り入れた方がいいと感じたこと)

- ・学食
- ・学校に自習室がある。(夜間まで使用できる。自由で勉強しやすい環境づくり。)
- ・車道が広い。
- ・横断歩道脇の parasol (熱中症対策として)
- ・居眠り防止用机(立ちながら使用できる。)
- ・目上の人を敬う意識(日本では若者でその意識が薄れつつあると言われている。)

日本のいいところ(韓国に取り入れた方がいいと感じたこと)

- ・湯船につかること(美容意識の高い韓国で受け入れやすいのではないか。)
- ・こたつの導入(冬場は非常に冷え込む。)
- ・トイレでペーパーを流せるようにする。
- ・道をきれいにすること(路上のごみ。観光客も歩きやすい。)

- 2) 2班：上原 青空、関口 詩乃、奈良 心優、二藤部 華、藤沢 颯太郎、
松元 里恋、元吉 さつき、山田 仁恋、吉松 葉月

共通点

- ・チャイムが鳴ること、給食があること、制服があることが学校生活で共通している。
- ・言葉が似ているものがある。 ex) 準備 時間 気分

相違点

- ・勉強に対する意識

韓国：国全体で勉強に対する意識高い / 日本：学校ごとに意識が違う

・意思表示

授業中の反応において、日本はおとなしいが韓国はオープンマインドで積極的に発言する傾向にある。

韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

・電子化

信号：文字が大きく表示されている。

横断歩道：足元に灯りがあるため歩きスマホ事故防止になる。

国会設備のデジタル化：議員の机にタブレットのようなものが常設されていた。

電子黒板：電子黒板の方が書いたり消したりの手間が省けるため授業の効率化が図れる。先生のタブレット画面も投影できるため授業の準備から実施がスムーズになる。

キャッシュレス：日本よりもキャッシュレス決済が浸透していた。

・目上の人への対応

尊敬の心があり、目上の人に当たり前で敬語が使える。

日本のいいところ（韓国に取り入れた方がいいと感じたこと）

・トイレまわりの充実

日本はトイレトーパーの技術も高く、水に流すことができる。韓国ではトイレ内にゴミ箱が設置されてあるが衛生的にも良くないため日本のように流せる仕組みを導入するのが良いと感じた。

・マナー向上

クラクションはあおりではなく注意のために使うべき。路上駐車や路上喫煙など公共の場でのマナーを改善するべきだと感じた。

3) 3班：有村 彩璃、川越 なつき、児玉 桂都、酒井 楓香、玉城 あいみ、
藤原 結、武藤 昊、村井 美月、山下 百波

共通点

・主食がお米

相違点

・整形や美意識に対する意識

韓国は日本よりも整形や美意識に対する社会的認識が高く、日本よりも偏見が少ないところ。

韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

- ・立ちデスク
眠い時などに立った状態で授業に参加できる足の長いデスクの導入。
- ・電子化
国会などの公の場でも電子化が進んでいる。
- ・周りを気にしない（いい意味で）
自分らしさを大切にし、ありのままな人が多い。

日本のいいところ（韓国に取り入れた方がいいと感じたこと）

- ・トイレまわりの整備
トイレットペーパーが垂直にきられたり、紙が流せたりするところ。
- ・歩きタバコ
韓国では街中の路上等での喫煙や歩きタバコの人が多く、受動喫煙防止の観点からも指定の場所をもっと設置する等法整備をした方がよい。

4) 4班：石川 莉子、梅田 愛理、竹原 あいら、南部 絢加、松本 茉莉、眞野 はる、
山村 佳稟、横山 愛理、吉澤 佳名

共通点

- ・両国どちらも人を敬う気持ちがある。

相違点

- ・人柄

韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

【自由度が高い】

それぞれの個性を大切にして、お互いを認めていく心を持つことが大事である。

～ 培花女子高校の訪問で感じたことを例に～

- ・ファッション・制服・髪色
気候に合わせて、学校指定ではないものを着ており、髪色も自由に染めている。
- ・体育の授業
バドミントン・スポーツライミング・ダーツの中から自分の好きな競技を選んで行うことができるため、運動が苦手な生徒でも、楽しく授業に取り組める。
- ・授業中の態度
先生から意見を求められた際に、韓国の生徒は積極的で反応が良かった。日本の生徒は自分の中で解決しがちだが、そういった点に違いが見られた。

【その他にも...】

- ・ 光る / 渡ることのできる秒数が出る横断歩道
渡る際に分かりやすく、安全である。
- ・ カフェの多さ
仕事や勉強のために気軽に入ることができる。
- ・ サービス精神が旺盛であること
おかずが食べ放題、(買い物時)ワンプラスワンなどが当たり前である。

日本のいいところ (韓国に取り入れた方がいいと感じたこと)

- ・ 非喫煙者への配慮
路上喫煙への考え方の見直し、レストランを全面禁煙にするなど
- ・ 路上駐車を減らす取組み
メーターを設けて取り締まりを強化するなど
- ・ 衛生環境の整備
トイレットペーパーを流せるトイレ
ゴミ出しの曜日を定める。(種類ごとに分ける)
再生可能エネルギーの利用にも繋がり、SDGsの目標達成にも近づくのではないかな。

5. 参加者アンケート

(1) アンケート集計結果

日本人として世界に貢献したい。

■ とても思う	64%
■ 少し思う	36%
■ あまり思わない	0%
■ 全く思わない	0%

n = 36



外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたい。

■ とても思う	89%
■ 少し思う	11%
■ あまり思わない	0%
■ 全く思わない	0%



交流した外国の人と将来も繋がりをもちたい。

■ とても思う	97%
■ 少し思う	3%
■ あまり思わない	0%
■ 全く思わない	0%



(2) 結果の分析

○外向き志向

■ とても思う	83.3%
■ 少し思う	16.7%
■ あまり思わない	0%
■ 全く思わない	0%



【外向き志向とは】

文部科学省の定めた調査項目3項目「日本人として世界に貢献したいと思いますか?」「外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたいと思いますか?」「交流した外国の人と将来も繋がりをもちたいと思いますか?」のアンケート結果を集計したものである。国立青少年教育振興機構では、それらの問いに対して肯定的な回答の合計が80%以上を得ることを目標とし国際交流事業を行っている。

6. 事業後の成果発表

日本人参加者には、本事業終了後の課題として各自で学んだ成果について各所属校の生徒に向けて、発表することを求めている。以下は報告例（抜粋）である。

1)

日時	2024年11月14日（木）
会場	視聴覚室
参加人数	77人
主な発表内容	<p>派遣事業の概要</p> <p>「日韓共同未来プロジェクト」の一環として日韓の相違点を学び、自分たちが今後日韓関係を良くしていくためにどのようなことが出来るのかを班で考え、成果発表会を行いました。また、高校・大学訪問、ソウル支庁、国会議事堂、韓国民俗村観覧、明洞散策、ハングル書体のカリグラフィー授業を通して韓国文化を現地で吸収することが出来ました。</p> <p>特に印象に残った活動</p> <p>培花女子高校訪問が特に印象に残っています。韓国の高校と日本の高校は相違点が多くてとても驚きました。体育の授業では、日本は1つの競技をみんなで協力してプレーしていく形ですが、韓国はバドミントンやダーツ、スポーツクライミングなど自分のやりたい競技を自由に楽しく行っているところが印象的でした。服装では、学校指定ではないパーカーなどを着ている生徒や髪を染めている生徒も多く見られ、自分の個性を大切にしている、かつ相手もその個性を認め合っているということが日本とは違う考えで面白いなと感じました。他にも、日本はK-POPやK-drama、韓国は日本のアニメやゲーム、映画に関心を持つ生徒が多くいて、互いのエンターテインメントの好きなところをシェア出来たことが嬉しかったです。</p> <p>まとめ・感想</p> <p>私自身、海外に行くことが初めてだったので不安でいっぱいでしたが、全国から韓国に興味を持っている高校生や現地の学生と日韓について話し合い、それぞれの意思を伝え合うことが出来てとても嬉しかったです。また、訪問する先々で新たな学びや発見があったことは現地に行かないと体験することは出来ないのも、この事業に参加して貴重な時間を過ごすことが出来て良かったです。また、韓国の方々は優しくて思いやりの</p>

	<p>ある方ばかりでした。相手が私たちを日本人だと分かった時に韓国語がとても上手ですねとお褒めの言葉をくださったり、雨が降り始めた時にそっと傘をさしてくださったりしました。また、各国にはそれぞれの文化や伝統があることがとても魅力的で、自国と他国を比較することで良さを見つけることを私たち次の世代が今からでも行っていかなければいけないと思います。日韓の架け橋となるために、この事業に参加して学んだことを周りに伝えていくことや韓国の歴史背景などまだまだ知らないことが自分にはあると分かったのでこれからも勉強して知識を蓄えていくことをしていきたいと思います。とても思い出に残る素敵な4泊5日間をありがとうございました。</p> <p>発表方法、対象 発表方法:スクリーンにスライドを映しながら説明する 対象:高校2年生</p>
--	--

2)

日時	2024年11月9日(土)
会場	講堂
参加人数	120人
主な発表内容	<p>○派遣事業の概要</p> <p>日韓教育・文化交流を通して、日本と韓国の共通点・相違点を示し、説明できるようになる。</p> <p>○特に印象に残った活動</p> <p>培花女子高等学校訪問</p> <p>1番印象に残った理由は実際に韓国の高校生と学んだ韓国語を使い会話することができたことが1番印象に残っています。私は、正直韓国語はほとんど独学、そしてYouTubeやドラマを観て勉強した韓国語、そして発音が難しいという点でしっかりと伝わるかどうかとても心配でした。でも、実際に現地の高校生と韓国語を使って会話することができ、自信を持つことができました。また、「発音がすごく上手」と言われた時には、今まで感じたことのない喜びを感じることができました。また、実際に現地の高校で高校生活を送ってみると日本と韓国の勉強に対する姿勢の違いを感じることができました。例えば、韓国には授業中に眠たい人が立って勉強できるようにどこの教室にもスタンディングデスクがありま</p>

した。他にも、韓国の高校生は塾に行っていない人の方が少なく、クラスのほとんどの人が塾に通っているという事実もわかりました。

○まとめ、感想

4泊5日という短い時間でしたが、実際に行って、街を歩いて、体験して、現地の人と交流することで発見したことがたくさんありました。また、その国の言語を学び、その言語を使って現地の人と会話をすること、今翻訳機がスマホのアプリとして入っているのに、その国の言語を学ぶ理由は心同士がつながることができるからではないのかなと思いました。実際、私は交流した韓国の高校生とはインスタグラムを交換し、今でも連絡を取り合っています。これは、私が韓国語を喋ることができ、会話し、心が通じ合えたから今でもできていることではないのかと思っています。今の時代、スマホ一台さえあれば画面上ではどこの国にも行けることができます。調べたらなんでも出てきます。でも、今回の事業を通して感じたことは、実際に行かないとわからない小さな文化の違いがたくさんありました。飛行機で2時間ちょっとの国でも、こんなにたくさんの相違点がありました。地球の反対に行くとなんてなるのでしょうか。そう思うと、もっといろんな国に行ってみたいと感じることができました。

今回の事業に参加して私はとても良かったなと思いました。韓国の友達や、日本の友達など仲良くなった人たちが何人もいます。そして、観光ではできない経験がたくさんできました。これは、私の一生のうちの大切な思い出のひとつです。このことから、私は何にでも挑戦する、興味があるなと思ったらやってみる。ということが大切ということがわかりました。これからの人生も何にでも挑戦という気持ちで色々なことに挑戦していきたいなと思いました。

○発表方法、対象

発表方法：学校の説明会（生徒にインタビューのタイミングで）

対象：中学生とその保護者

7. 成果と課題

1) 団長 栗原 団司 (国立江田島青少年交流の家 次長)

はじめに

「パリパリって知ってますか？」

私が、団長として参加した「日韓高校生交流事業」の出国時、研修生から聞きなれない言葉を教わった。大韓民国の国民性の一つとしてあげられる「スピード感」とのこと。「1日1回は、『パリパリ(早く早く)』という言葉をお願いしますよ」と補足してもらった。自身の経験から、事前に訪問国のことを調べる癖をつけていたつもりだったが、自身の浅学を恥じるとともに、研修生のちょっとした一言に頼もしさを感じるスタートとなった。隣国として様々な歴史的背景を持つ国での研修...私の懸念をよそに、研修生は主体的に希望し、国際交流をしようとする意思を示し、本事業に応募してきた。かくして、研修生一人ひとりの「現地でリアルな交流をしたい」という強い思いはこの事業における大きな成果へとつながった。

まず、本事業においては、NIIED(国立国際教育院)、東国大学、培花女子高等学校、インテリジェンス(現地エージェント)をはじめとした多くの関係機関・団体による厚い支援をいただき、研修生にとって何ものにもかえがたい貴重な経験をさせていただいた。同時に、本事業は日本各地から主体的に参加した研修生の熱意により大変有意義な事業になったと確信する。

成果と課題

訪韓前の全体 MTG で全員が参加者の顔と声をきちんと一致させて代表を決めたい、全員の同意の元研修をスタートさせたいという思いから全員の自己紹介を行い、訪問先のあいさつ担当を決めた。その時、日本団団長として「日韓両国の青少年交流を通して、互いの絆を深める」「研修生一人ひとりが、非公式大使である自覚をもって臨む」ことなどを伝えた後、自然と「日韓の友好の架け橋となろう」という言葉が口から出た、今回の訪韓団の未来を願う言葉だった。オンライン研修のため、画面越しではあったが、研修生も真剣にその言葉を受けとめてくれていると感じた。

派遣団として参加が決まった研修生の志望動機は「K-POP が好き」「韓国ドラマを見ている」「韓国の食に興味がある」「韓国語を勉強していて、将来は留学したい」「韓国語のスピーチ大会に挑戦したことがある」「今回は自分の語学力がどれくらい通じるか、実際に試したい」「韓国の人とリアルな交流をしたい」等等...実に様々だった。しかし、研修生の動機の行間にある熱意や意欲はとても大きく、グローバルな視野や将来的に友好の架け橋となりうる素地を肌で感じる事ができた。班 MTG を行った時も様々な話をしていく中で、「やりたいことはやる、やるべきことはやる」姿を見ることができた。研修生は希望する活動のために、しっかりとメリハリのある行動をしていたのだ。

これは、後の研修に大きく役立つことになった。全体 MTG では、お互いの顔や声を知った上で、訪問先のあいさつ担当を決定した。個人的な思いとしては、全体の中で立候補できる場をつくり、主体的に研修に臨んでほしいという思いがあった。自主的に立候補できるかどうかという懸念をよそに、実に主体的に、自らやる意思を明示してくれた。立候補者は「自分を変えたい」「自分で意思表示することに意味がある」等、後で動機を語ってくれた。何よりその思い、全体 MTG の中で挙手した行動を大いに評価したい。その決断が今回の交流事業で大きな意味をなすことになり、引率スタッフが研修生を信頼し、有意義な活動にするためにどうすればいいかという判断材料になったからだ。また、実際の活動場面で、その発言に裏付けされる行動力...班活動で皆のことを考えた発言がある、班員がグループとしての動きをどうすべきか考えた活動ができている等...が生きていたと言える。

今回の研修の一番の思い出を問うと「高校訪問」と皆が答えるほど、培花女子高等学校訪問は、研修生にとって特別なものだった。正門まで少し距離があったため、バスを降りて歩くことになった。研修生は緊張しながらも、グループ内で活動を楽しみにしている話をしていることから、まだ見ぬ友達へ思いをはせているように感じた。正門をくぐると学校紹介 PV に出ていた建物が我々を迎えてくれ、突き当りの研修室から「こんにちは」という元気な挨拶が響いた。高校生の笑顔に緊張もほぐれ、互いの距離が一気に縮まるのを感じた。研修生は開会式が始まる前の待機時間でさえ、何気ない会話を楽しんでいた...いや、現地高校生の積極的なコミュニケーションに圧倒されているようにも感じた。また、研修生の一瞬も無駄にしないという意欲を感じた...開会式の後には、各グループで、ペアの高校生と授業を一緒に受けることにより、共通の話題で盛り上がる事ができた。高校生は韓国語と日本語を駆使し、とにかく話しかけてくれていた。日本団の研修生も日頃の成果を試すべく果敢に韓国語で話かけ、グループ全体が笑顔になるシーンを何度も目撃した。驚かされたのは、韓国の高校生の積極性だ。日本団が驚くほど、気軽に堂々と、時には前のめりでコミュニケーションをとる姿や話題の豊富さ...また、日本団が困っていても、優しく、根気よく、相手の目を見て話してくれた高校生たちの姿...その全てが交流の機会となっていった。また、同様に日本団の意識の高さに驚かされた。少しでも話をしよう、交流しようという気持ちが伝わるほど、主体的に、意図的に話しかける姿を目にした。音楽の時間には一緒に楽器を奏で「アリラン」を歌った。体育では伝統的な韓国の遊びにチャレンジした。ディベートでは両国の相違点について自由討論を行った。その全てに深い交流を促す要素が盛り込まれ、閉会式では「お互いに離れたくない」という気持ちが会場を包んでいるのを感じた。いよいよ培花女子高等学校を後にするときは、互いに名残惜しい気持ちがある中、正門まで見送ってもらった。その活動の一瞬一瞬が研修生にとっての韓国というイメージとなったことだろう。事前に「交流を継続できるような関係を築こう」と伝えてはいたが、交流についての思いの強さについて、研修生と高校生の意識の高さには、ただ驚くばかりだっ

た。研修の中でも有意義かつ重要度の高い研修ができたと感じた。

また、楽しみにしていた明洞散策では、より充実した活動するために「やりたいことをやる」という各自の希望に合わせたグループを作った。少人数で多くの場所を回ることにより効率的かつ有意義な活動ができた。引率スタッフはもちろん、エージェンツの方々に班についてもらうことで安全面を確保し、自分たちで計画した内容で、韓国語を駆使しながら、街を散策する...韓国の街を満喫しながら、体験を深めていく姿...まさに今回の交流事業のテーマにふさわしい一面を見ることができた。土砂降りの中の散策活動だったが、「サムギョブサルの店に行ってお店の人と話せた」「通訳されることなく、自分たちだけでも活動できた」「現地での自由行動は最高だった」等、研修生は笑顔で充実した活動だったことを口々に話していた。完全燃焼だった明洞散策はあっという間だった。あっという間に感じるほど有効な活動になりえた。

研修生が心より楽しみにしていた各体験活動の完全燃焼により、異文化の中で感じたことをしっかりと伝えるべく報告会の準備時間は内容の深い、有意義な時間となった。班ごとのまとめの時間は短かったが、各班が工夫し、活動中に考えていた両国の相違点や気付きを的確に集約し、それぞれが感じた感想を等身大の感性で伝えることができた。訪韓前のイメージに思いを膨らませていた研修生が「想像の何倍も素晴らしい実際の体験」に感動していることがよく伝わってきた。「両国の友好の架け橋」となりうる研修生のすばらしい成果報告会となった。また、報告会後の夕食会で、イ・ホングセンター長から「研修生の皆さんの純粋な姿に感動しました。」とお話をいただいた。ふと見渡すと、班の垣根を越えて生き生きと交流している研修生の姿を見ることができた。異文化体験だけでない訪韓団の中の仲間づくりとして、研修の成果の一端を垣間見たような気がした。

最終日の成田空港では、班ごとの解散としたが、別れがたく、なかなか帰路につけない研修生たち...一言一句に涙を浮かべる様子から、日本団としての仲間づくりも充実していたことを実感した。空港で最後の一人を見送った後、これからも研修生の友情と絆は継続されると感じた。

課題として挙げるべきことはないが、敢えて述べるならば時間の確保だ。限られた時間の中で、最大限有意義な活動を行うことは鉄則だが、これだけの素晴らしい条件と、研修生のやる気があるなら、もっとじっくりゆっくりとプログラムの意図や趣旨を咀嚼し、消化する時間が欲しいと考える。研修生が学び、感じた「パリパリ」文化を自身の経験や異文化比較として自己研修に落とし込む時間の保証があるとより良い研修になると考える。

おわりに

帰国前、現地スタッフと同じエレベーターにのった。全員が乗った時点で、私は何も考えず「閉」ボタンを押した。現地スタッフは「日本の方でも(『閉』ボタンを)押す

んですね。パリパリですね。」と微笑まれた。振り返ってみると、確かに1日1回聞いていた言葉「パリパリ」...ささやかではあるが、私も無意識に異文化を感じる事ができていたように思う。

本事業の目的達成だけでなく、日本団研修生の安心安全と充実した研修をご支援いただいた NIIED のハン・サンシン院長、国際交流協力部キム・ドヒョン部長、国際交流イ・ホンゲンセンター長、教育交流協力チームのキム・ウンスク主務官をはじめ、東国大学日本学科ソン・ジョンヒョン教授及び大学生の皆さん、培花女子高等学校ノ・ナムヒ校長、シン・ミギョン先生（訪日団受入団長）、高校生の皆さん、現地エージェン「インテリジェンス」の皆さん、本事業に関わっていただいた全ての方々へ心よりお礼申し上げます。

今回参加した研修生一人ひとりが、本事業の体験をもとに未来へ向かって歩み始めている。本事業で培った絆が、大きく花開くまでには時間がかかるかもしれない。しかし、今回、貴重な体験をした研修生一人ひとりが、近い将来「両国の友好の架け橋」となることは確信している。

2) リーダー 阿部 麻由里（青少年教育研究センター企画室 主任）

「『本物』に触れる体験」

高校生という繊細で貴重な時期の「『本物』に触れる体験」に、引率者として関わることができて、大変光栄であった。月日が経っても、現地でのことを鮮明に思い出せるくらい、参加者と共に濃い時間を過ごした。

特に印象深かった体験として参加者が多く挙げたのは、培花女子高校への訪問である。韓国人の友達を作りたい、韓国語の実力を試してみたいと意気込む参加者が多かったことから、プログラムを通じて満足に交流できたことがうかがえる。また、実際に現地の学校生活を一部でも体験できたことで、自分たちの日常生活とも重ね合わせて日韓の違いについて考えることができたのも大きかっただろう。

さらに踏み込んで、今後の進路や留学や職業について具体的に考え始める参加者も見られた。私自身「今回の研修での体験がずっと繋がっていくものになって欲しい」と考えていたこともあり、嬉しく思った。本研修で出会った方のうち、韓国の大学に在学中の日本人学生や、現地でコーディネーター等をしてくださった日本にルーツのあるスタッフの方々には特に刺激的で、そういった方々と接することができたのも、またとない「『本物』に触れる体験」であっただろう。

彼らが今後、今回の訪韓をきっかけにこういった成長を遂げ、大人になっていくのか。非常に興味深いことであるし、陰ながら応援し続けたい。

3) リーダー 柴谷 紗良 (教育事業部事業企画課 係員)

「本質的に知るとは」

東国大学のキム学科長は歓迎式の挨拶でこう述べた。「本質的に知るというのは、調べて得た知識ではない。自分で見て感じ得るということ。情報社会において体験学習は重要である。」

1班は「協力×共有×スキルアップ」という目標を掲げて過ごした。声を掛け合いながら行動し、街を散策しながら気付いた日本との違いをその都度共有して、また韓国語が得意な者は理解したことを他の仲間に伝える等、仲間意識をもって活動することができていた。自分の語学力を試そうと、大学生や高校生と韓国語での会話に挑戦し、笑顔で交流を楽しむ姿も見られた。最終日には、全員が班及び自分の目標を達成できたと振り返った。中でも同世代の高校生との交流が刺激的だったようで、「渡韓前に勉強したが、言葉が出てこないのが悔しかった。これからもっと勉強をがんばりたい」と話していたことが印象的である。現地での体験で本人が何かを感じ得たのだと思った瞬間であった。

私自身も韓国の教育環境について、学校等の教育現場をはじめとする施設を見て日本との違いを感じ、他国の教育を取り巻く環境に関心が高まった。今回の派遣で、私は体験の重要性を再認識した。

参加した高校生たちが、今後より広い世界で活躍していくことを期待している。

4) リーダー 松本 真也 (国立妙高青少年自然の家 係員)

「現地だからこそ得られる気づきや学び」

参加者の高校生たちは、それぞれの目標や思いを胸にこの事業に臨んだ。韓国語能力の向上はもちろん、生活や文化といった多岐にわたる分野に興味を抱き、事前のオンライン研修の段階から意欲的な姿勢が感じとれた。

成田空港に集合した際は、初対面同士の緊張感からか、高校生たちの表情には硬さが見られた。不安を抱えながらも仁川空港(韓国)に到着すると、参加者の多くが初めて訪れる韓国の風景に興味を示し、「想像していた韓国」との違いを観察している様子が印象的であった。

研修の中では、現地の大学生や高校生との交流で積極的にコミュニケーションを取る姿が特に目立った。同世代だからこそ話題が盛り上がり、文化や考え方の違いに気付くとともに、それを学びとして吸収している様子が見られた。日本では当たり前と思っていたことが必ずしもそうではないと実感し、それを通じて自分自身を見つめ直す機会になっていた。

海外という、日本の枠を越えた異なる環境や文化の中に身を置くことで得られる感覚や学びこそが、こうした海外事業の意義だと強く感じた。成果報告会では、「お互いの国を尊重していきたい」という声が多く聞けた。相手を変えようとするのではなく、

互いを尊重しながら交流を深めていくことの大切さを学んでいた。また、得た経験を自分の中に留めるだけでなく、積極的に発信していきたいという強い思いが語られていた。

5) リーダー 山下 詩恩 (国立淡路青少年交流の家 係員)

「賢い交流生活」

学生時代から海外の友人にも恵まれた私は、国際交流の大切さと新しい文化へ触れる楽しさを日本の高校生たちにも伝えたいと思い、今回引率として参加しました。

韓国での研修は、時間はタイトながらも高校生たちにとってとても充実した時間になったと思います。特に、東国大学での大学生との交流や明洞散策、そして培花女子高等学校での高校生との交流においては、普段学習している韓国語がとても活かされていたように感じました。お互いに言葉が分からない場面でも、翻訳機を使ったり英語を用いたりして自分の伝えたいことを相手に届けるという積極的な交流の場面を多く見ました。韓国の先生方が SNS アカウントの交換を促していたのも、現代の高校生ならではの交流の仕方だと感じました。

参加した高校生は初対面だったにも関わらず、最後には涙を流して別れを惜しむくらいに仲を深められたのは、引率の立場ながらとても嬉しく感じました。担当した班の高校生からもらった手紙には、「2班全員、今度は日本で会いましょう！」と書かれており私まで涙を流したくらいでした。これから進学・就職とそれぞれの道に進む中で、心強い仲間が韓国と日本両方にできたことが、参加した高校生の人生の財産になれたらと願います。

受入事業報告

1. 参加者名簿

1) 参加者

	氏名	ローマ字表記	学校	地域
1	チェ・ユジェ	CHOI, YUJAY	徳成女子高等学校	ソウル
2	パク・スンウ	PARK, SEUNGWOO	盤浦高等学校	ソウル
3	イ・シンヒ	LEE, SHINHEE	誠庵国際貿易高等学校	ソウル
4	チョン・ジウォン	JEON, JIWON	永信看護ビジネス高等学校	ソウル
5	チョン・イエナ	CHUNG, YENA	漢栄外国語高等学校	ソウル
6	ユン・ウンソ	YUN, EUNSEO	培花女子高等学校	ソウル
7	キム・ジェナ	KIM, ZENA	進明女子高等学校	ソウル
8	チョ・ハウ	CHO, HAEUN	玉蓮女子高等学校	仁川
9	ゴ・ドウオン	KO, DOWON	仁川女子高等学校	仁川
10	パク・イジェ	PARK, YIJAE	仁荷大学校師範大学附属高等学校	仁川
11	キム・ミンジョン	KIM, MINJEONG	仁川海松高等学校	仁川
12	キム・ユビン	KIM, YUBIN	仁川元堂高等学校	仁川
13	ハン・ユリ	HAN, YURI	常日女子高等学校	光州
14	チョン・ユンチェ	JUNG, YOUNCHAE	光州女子高等学校	光州
15	イ・ジミン	LEE, JIMIN	大田外国語高等学校	大田
16	チョ・ミンス	JO, MINSU	儒城高等学校	大田
17	ミン・ソヨン	MIN, SOYEON	大田道安高等学校	大田
18	イ・ミンギユ	LEE, MINGYU	大岷高等学校	蔚山
19	ユン・ジミン	YUN, JIMIN	ハンソル高等学校	世宗
20	イ・ヒョンドン	LEE, HYEONDONG	聖修高等学校	江原道
21	キム・ギュヨン	KIM, KYUYEON	華川高等学校	江原道
22	ガン・ヨンソン	KAN, YEONSEON	文幕高等学校	江原道
23	チョン・ミンソ	JUNG, MINSEO	清州外国語高等学校	忠清北道
24	キム・ユルハ	KIM, YOURHA	興徳高等学校	忠清北道
25	ノ・スンミン	NOH, SEUNGMIN	西原高等学校	忠清北道
26	キム・ボミ	KIM, BOMI	天安斗井高等学校	忠清南道
27	イ・シヒョン	LEE, SIHYEON	天安中央高等学校	忠清南道
28	クワン・ウンジ	KWON, EUNJI	成歎高等学校	忠清南道
29	チョン・イエウォン	JEONG, YEWON	天安佛堂高等学校	忠清南道
30	キム・スンジュン	KIM, SEUNGJUN	裡里高等学校	全羅北道

31	ノ・デヒョン	NOH, DAEHYEON	扶安高等学校	全羅北道
32	シン・ジュンソプ	SHIN, JUNSEOP	全北師大付属高等学校	全羅北道
33	キム・チェウン	KIM, CHAE EUN	慶北外国語高等学校	慶尚北道
34	キム・ヨンア	KIM, YEONA	北三高等学校	慶尚北道
35	ソン・ジミン	SON, JIMIN	金泉高等学校	慶尚北道
36	オ・ジョンフン	OH, JONGHUN	韓国 beauty 高等学校	済州

2) 引率者

	氏名	ローマ字表記	所属	地域
団長	シン・ミギョン	SHIN, MIKYOUNG	培花女子高等学校	ソウル
引率	チョン・ジョンヒ	CHUN, JEONG HEE	蔚山広域市教育庁	蔚山
引率	ソン・ジョンハ	SONG, JEONGHA	培花女子高等学校	ソウル
引率	イ・スヨン	LEE, SUYOUN	国立国際教育院	ソウル
引率	イ・ギョンフン	LEE, KYEONGHUN	国立国際教育院	ソウル

2. 日程

	日付	時間	プログラム
1	10月8日 (火)	午前 午後	成田空港到着 オリエンテーション
2	10月9日 (水)	午前 午後	訪問：東京都立葛飾総合高等学校 見学：國學院大學博物館
3	10月10日 (木)	午前 午後	訪問：早稲田大学 体験：江戸染色
4	10月11日 (金)	午前 午後	学習成果発表会 池上本門寺 お会式
5	10月12日 (土)	午前	成田空港出発



3. 受入事業概要

< 10月9日(水) >

東京都立葛飾総合高等学校

葛飾総合高等学校では、2、3年生の在校生徒とパディを組み、日本史や英語、被服など様々な授業に参加した。午後は1年生の各クラスに分かれて入り、学校生活や互いの国の好きなもの等自由に話し合った。同年代の日本の高校生との交流を通じて、日韓の共通点や相違点への理解を深めた。



授業を受ける様子



みんなで昼食



話し合いの様子

國學院大學博物館

校史、考古、神道の展示について、それぞれ専門の教授から説明を受けた。日本の歴史や文化を知るとともに、日本と韓国が昔から交流を続け、互いに影響し合ってきたことを学んだ。



博物館を観覧

< 10月10日(木) >

早稲田大学

早稲田大学では担当者から早稲田大学の特色や留学するにはどのような方法があるのか等の説明を受けた。また、韓国からの留学生と意見交換を行い、日本での生活や進路等、韓国団が疑問に思っていることを話し合うとともに、韓国語の授業にも参加し、それぞれの言語を学ぶ理由について学生と共有した。



留学生との意見交換



韓国語の授業に参加



キャンパスツアーの様子

江戸染色体験

日本の伝統文化の体験として、大正時代より新宿で染め着物や小物を販売している「染の里おちあい」から講師を招聘し、伝統的な江戸の染色技術を体験した。好きな色と型紙を使って生地に型染めし、オリジナルのサコッシュを作成した。日本の伝統文化を体験することで、日韓の文化を比較する機会になった。



江戸染色を体験



オリジナルバッグ完成

< 10月11日(金) >

池上本門寺お会式

約740年の歴史を持つ池上本門寺の江戸時代から続く催しを訪れ、日本の伝統的な行事を体験した。縁日としてお祭りにもなっているため、屋台料理を食べたり、おみくじを引いたり日本独自の文化を体験し、地域に根付く伝統行事の雰囲気味わった。



おみくじ体験



お祭りを満喫

4 . 学習成果発表会

1) 1 班

共通点

- ・ 授業時間が両国とも 50 分であること。
- ・ 部活動があること。

相違点

- ・ 昼食：日本では、お弁当を持参したり、自動販売機で購入したりするのが一般的だが、韓国では、学校で提供される給食を食堂で食べるのが一般的である。
- ・ 部活動：日本では、放課後に部活動に多くの時間を割き、活動に力を入れている。韓国では、授業時間内に部活動が組み込まれているのが特徴である。

日本のいいところ（韓国に取り入れた方がいいと感じたこと）

- ・ 日本の部活動
韓国では、部活動の多くが勉強に関連しているが、日本のように放課後、自分の趣味に合った活動に参加することで、勉強によるストレスを軽減し、メンタルヘルスの向上が期待できる。

韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

- ・ 韓国のスタンディングデスク
授業中に集中力が切れ眠気に襲われたとき、韓国の教室でよく使用される。スタンディングデスクを活用することで、学習効率の向上が期待できる。

2) 2 班

共通点

- ・ 地震と防災対策
日本は地震が頻繁に発生する国であるが、近年では韓国でも地震の発生が増え、建物の耐震設計が重要視されるようになった。
両国とも耐震技術に力を入れており、防災対策が共通の課題となっている。
- ・ SNS と情報共有
情報化社会の中では、SNS は重要な交流手段となっている。葛飾総合高校を訪問した際、日本の高校生たちと話す中で、韓国の高校生と同じコンテンツを利用していることがわかった。同じ SNS を共有することで共感が生まれ、国際交流がより身近に感じられるようになった。

相違点

- ・ 自転車の利用率

日本は交通費が高く、自転車専用道路も整備されているため、自転車の利用率が韓国よりも高い。また、韓国にない自転車登録制度があり、盗難時の発見が容易になるというメリットがある。

・電線の地中化

日本では、多くの電線がまだ地上にあり、地震や台風の際に危険を伴うと考えられる。韓国では、電線の地中埋設工事が進んでおり、街中で電線を見かけることはほとんどない。

3) 3班

共通点

- ・古代韓国と日本では、いずれも中国の漢字を使ってそれぞれの言語を表記していた。

相違点

- ・日本は天気に関係なく湿度が非常に高い。韓国は梅雨の時期など一定の期間だけ湿度が高い。
- ・日本の大学のキャンパスは韓国よりも小規模で、複数のキャンパスが近距離に配置されている。

日本のいいところ（韓国に取り入れた方がいいと感じたこと）

- ・大学入試の手段として利用される部活動を、日本のように学生の成長を目的とした形で活性化させる必要がある。
- ・街の静かさやクラクションを鳴らさないマナー、スピード違反やゴミの投棄がほとんどない日本の市民意識を見習う必要がある。
- ・観光事業の拡大を図るべきであり、日本のように固有の文化を積極的に発信していく必要がある。

韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

- ・韓国の医療や交通システムを取り入れることで、生活の快適さを向上させることができる。
- ・アナログなシステムをデジタル化することで、行政業務の効率が上がり、非常事態に迅速な対応が期待される。

4) 4班

相違点

- ・日本では実生活に役立つ基礎理念を丁寧に教えるが、韓国では詰め込み式の授業が主流である。
- ・放課後の過ごし方が日本は部活動、韓国は塾や自主学習。

日本のいいところ（韓国に取り入れた方がいいと感じたこと）

- ・趣味活動を取り入れることで、学業と余暇のバランスを改善する必要がある。

韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

- ・韓国の入試に向けた熱意。

5) 5 班

スマートフォンの利用

韓国：多くの学校で授業中にスマートフォンを提出させる。

日本：スマートフォンの提出を求めない学校が多い。

メリット...提出を求めないことで、授業中に調べ物が検索可能、自由な雰囲気
で授業を受けられる、学生との連絡が早くなる。

デメリット...授業中の集中力低下、校内でのネット上のいじめのリスクが高ま
る。

提案：基本的には提出を求めない。授業の重要性に応じて、提出させる柔軟な仕組み
を導入すべきだと思う。

学校での給食

韓国：給食が一般的である。

メリット...栄養のバランスが整い、家庭の負担が軽減される。

デメリット...メニュー選択肢の減少。国の費用負担の増加、廃棄問題が生じる

日本：お弁当が主流である。

メリット...個別のニーズに応じたメニューが可能で、家庭の伝統を守られる。

デメリット...お弁当作りに時間と労力がかかり、経済的格差が示される可能性
がある。(いじめ問題)

提案：両国の良い点を活かし、個人のニーズに応じて柔軟に選択できる給食申込制度
を導入する。

5 . 学生リーダー感想

韓国団が同年代の日本人と交流する時間をより多く確保できるように、実施期間中に日本人学生が学生リーダーとして帯同した。

- (1) 今回の事業を通して韓国の国の文化・習慣についてより深く知る機会になった。韓国の方と5日間の間四六時中ずっと一緒に居ることがなかったのでとても刺激的だった。私自身韓国語が少し喋れるということもあり、班のメンバーともすぐに打ち解けることができた。

また、自分が運営側で参加するの初めてだったため、どのような事を気にすればいいのか、何に気をつければいいのかが全く分からない状態で参加したが、引率の方そして、先輩方のサポートがあり充実した5日間を過ごすことができた。事業の中で大変な事も少なからずあったがそれを超える良い経験をする事ができた。この事業の中で、上手く日本語ができなかった人たちが、一緒に過ごしているうちに、何を伝えようとする際に韓国語で話したり、翻訳機を使うのではなく自分の知ってる日本語で話そうと努力していた所が嬉しかった。また、最終日にはあいさつやちょっとした会話ができるようになっていた事もとても嬉しく感じた。今後もこのような異文化交流事業には積極的に参加できればいいと思う。

- (2) 自身が日本のことを全く知らないことに気付いた。大学訪問をしたとき、神社へ行ったときなど様々なシチュエーションで韓国の生徒たちに日本のことを質問された。しかし、詳しく答えられることはあまりなく、なんとなく知っている状態なのだと認識した。

また、「言葉が通じるとは、心が通じること」だと実感した。事業を行う中で意思疎通が重要だが、私は、韓国語を話すことができなかった。韓国の生徒たちは日本語を話せる人ばかりではなく、伝える努力をしたが、伝わらないこともあった。伝えたいことが通じたときに初めて本当に分かりあえると実感し、自身の言語力を高めるため、後期の大学の授業で韓国語をはじめとする言語を学んでいる。

事業を行う中で課題も発見できたため、将来、私が海外の学生をつなぐ事業を創るときに今回の事業の経験や学びを活かしたい。

今回の事業では、学生リーダーとしてかけがえのない時間を過ごすことができ、新しい夢ができた。外国と日本をつなぐ架け橋となれるよう、人生を切り開いていきたい。

- (3) とても楽しく貴重な体験になったと思いました。一日だけしか参加することができませんでしたが、生徒たちと仲良くなり別れが寂しかったです。日韓の共通点や相違点を発表するプレゼンテーションでは私には気付かない生徒たちならではの目線があり、新しい学びになりました。韓国の学校と日本の学校は全く違うものであり生徒たちが日本の部活動やってみたいなと口々に言っていたのが印象に残っています。

す。また、韓国語を喋った後に日本語を喋るなど言語の壁を超えてしっかり伝えようと工夫してるところが凄いなと思いました。観光の時間では生徒が楽しそうに色々なものを買ってる姿を見て私まで嬉しかったです。また、オススメのお菓子教えて欲しい！や先生の好きなものはなんですか！と沢山質問に来てくれて一緒にお目当てのものを探すのが楽しかったです。お祭りでも自分で日本語で頑張ってるコミュニケーションをしようとする生徒が多く自分で話して買えた商品を食べることに満足そうで見ている微笑ましかったです。またぜひこのようなサポートをしたいと思いました。

(4) 日韓交流事業、とても楽しかったです。韓国の高校生の皆さんと関わり、日本と韓国両方の文化に触れ、お互いに学び合う時間になったように感じます。高校訪問では、日本と韓国の高校生が関わりあっている様子を見ることができました。韓国の高校生に話を聞いてみると、「日本の授業はとても楽しい」と言葉にしていました。日本と韓国の学校の違いにも気付いているようでした。日本の高校生は韓国の言葉を一生懸命調べて話して伝えようとする様子や、交流が充実しとても楽しそうな様子が印象的でした。逆に韓国の高校生も日本語を話して伝えようとする様子や日本の学校やそこにいる生徒との関わりをととても楽しんでいる様子が見られました。改めて、日本の授業の作りかたも学び、日本と韓国相互のやり取りも見て面白く、交流も深まっていたのでよかったですと思います。お互いにとっていい出会いになっていたと思います。事業後、私は韓国の言葉や文化がよく目につくようになりました。私としてもひとつ生活に変化が訪れ、これからまた一段と成長に向かえそうです。

(5) 色々あったが楽しかった。あまりできない経験をさせていただいたと今でも感じている。参加申し込みをした時から思っていたが、やはり言語の壁は大きく、高校生に頼る部分も大きいと感じた。引率の先生には逆らえない生徒がほとんどで、後々話を聞くと圧をかけられることもあったと言っていたので、韓国側の代表といった立ち位置ではあるが高校生のサポートが必要であり、私も不十分であったなと感じている。職員方は本当に大変だったと思うので、通訳等の先方と協議できる人材を増やした方が日本側が動きやすいのかなと感じた。他にも細かいところで思うところはあるが、みんな臨機応変に対応しており、本当に大変だったと思うし、ある意味ではそのおかげでより仲良くなったのかなとも感じている。

4日間お世話になりました。

6. 成果と課題（国際・企画課）

（1）企画について

本事業は、日本と韓国の青少年の交流を通じて日韓の友好親善を深めること及び国際的な視野と資質を持った青少年を育成することを目的に実施している。この目的を達成するために、全日程で日本人大学生にリーダーとして帯同してもらい、高校訪問や大学訪問を通じて、同年代の日本人の生活を体験する機会を多く設ける等、日韓の青少年が深く交流する時間を数多く取り入れた。

（2）成果

まず、日本の伝統的な文化を体験したり、日本の歴史を学んだりしたことは、同じ文化的ルーツを持つ日本と韓国の共通点や相違点を考える上での一助とすることができた。日本の歴史や伝統文化を実際に見て、聞き、肌で感じることで、来日しなければ得られない深い探求に繋がった。

次に、早稲田大学の訪問では、実際に日本に留学している韓国人留学生から日本での暮らしや学びについて話を聞くことができ、日本の学生のキャンパスライフを垣間見ることで、国際的な視野を養うことができたと考える。韓国団に行ったアンケートでは「日本への留学を準備し、日本での経験を活かしたいと思う」という感想があり、日本での学びに対する前向きな姿勢が見られた。

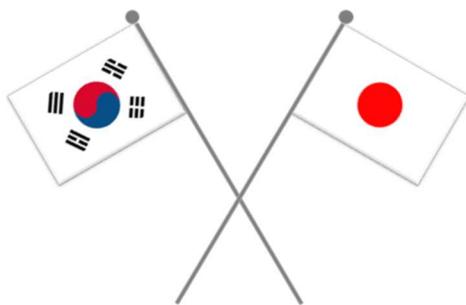
また、高校訪問では多くの同世代の日本人高校生と交流をすることで、多様な価値観に触れ、視野を広げることができた。韓国団からも「日本人と日本に対する理解が深まり、相互尊重の姿勢を学ぶことができた」や「日本の生徒たちと直接話すことで、文化や言語について知ることができて良かった」といった声が多く上がっていた。日韓の高校生同志で連絡先を交換している者も多くいて、本事業終了後も交流の輪を広げることができており、今後も日韓友好のためにより一層親善を深めることを期待している。

（3）課題

学習成果発表会においては、韓国団から「初めて会った人たちと意見を合わせるのが難しい」「準備時間が足りない」との指摘が多く寄せられた。次回からは、準備時間を十分に確保するとともに、引率者と連携して参加者に適切な助言を行うことで、より充実した発表ができるよう改善を図りたい。また、参加者が一生懸命に準備し発表を行っても、発表を直接聞くことができる人が限られている現状がある。訪日中にお世話になった方々にも広く声をかけるとともに、ハイブリッド形式を導入することで、韓国団が学んだ内容をより多くの人々に届けられるように工夫したい。

（4）謝辞

最後に、訪問先の関係者の方々をはじめ、全日程帯同いただいた通訳の方や学生リーダー等、事業運営に携わってくださった皆様のおかげでより有意義な研修を実施することができた。本事業にご協力いただいた全ての方々に心より謝意を表したい。



令和6(2024)年度 文部科学省委託事業「青少年国際交流推進事業」
日韓高校生交流 事業報告書

令和7年2月発行

編集発行

独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国際・企画課

<https://www.niye.go.jp> <https://ie-program.niye.go.jp/>

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

TEL 03-6407-7616

本報告書は、文部科学省の委託事業「青少年国際交流推進事業」として、独立行政法人国立青少年教育振興機構が実施した令和6(2024)年度「日韓高校生交流事業」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。